

川崎市北部におけるアカアシオオオカミキリ *Chloridolum japonicum* (Harold) の分布拡大と繁殖行動について

雛倉正人*・三田村瞬*

Distribution expansion and breeding behavior of the longicorn beetle, *Chloridolum japonicum* (Harold) in the northern district of Kawasaki City

Masato Hinakura* and Shun Mitamura*

はじめに

アカアシオオオカミキリ *Chloridolum japonicum* (Harold) は、クヌギ *Quercus acutissima* Carruth. 林で見つかる夜行性カミキリムシで、神奈川県レッドリストで絶滅危惧 I 類に選定され、横浜市南部から三浦半島にかけて僅かな記録が知られていた(高桑, 2006)。最近横浜市青葉区で発見され、2022 年の記録は神奈川県記録として 29 年ぶりであるという(伊藤・真田, 2022)。川崎に最も近い既知産地は東京都稲城市で、2007 年の夏短期間確認されたとのことである(伊藤ほか, 2009)。筆者の一人雛倉は 2005 年から 12 年間川崎市麻生区に居住し、夜間雑木林の観察を行っていたが、本種に出会うことはなく、多摩丘陵では珍しい昆虫という認識を持っていた。一方、東京都の武蔵野台地では、市街地に近い雑木林で本種が見られることは古くから知られており、2022 年の夏から本種が急増し、昨今蔓延しているナラ枯れとの関連を示唆する玉川上水沿いの観察例が報じられた(韓, 2023)。また 2023 年に入ってからの近隣の確認地域として、横浜市緑区、東京都多摩市および町田市(七里ほか, 2023)があり、神奈川県内の遠隔地では茅ヶ崎市(和田ほか, 2023)、秦野市(黒川ほか, 2023)の記録が報告された。東京都の狭山丘陵でも急増したという(原島, 2023)。

雛倉は 2019 年夏、川崎市内の生物解説書である「川崎の生きもの」(川崎市青少年科学館, 2021)の中で、執筆陣として夏季樹液に集まる昆虫の生態を取材中、麻生区黒川の 1 本のコナラ *Q. serrata* Murray の樹液で本種を見出した。一方、筆者の一人三田村は 2022 年に宮前区において本種を見出した。そこで雛倉は 2023 年夏、川崎北部の丘陵地で夜間雑木林を探索した結果、複数地点で多数の本種を観察し、川崎において本種が広範囲に生息圏を拡大していると確信した。

また、本種の行動や餌についての知見も得ることができたので、ここに記録しておきたい。

採集・観察記録

[麻生区] 1♀, 黒川, 12-VIII-2019, 雛倉正人採集・同日数頭目撃・一部撮影(コナラ樹液)(図 1); 1♂2♀, 黒川, 8-VIII-2020, 雛倉正人撮影(コナラ樹液); 多数, 黒川, 24-VII-2022, 雛倉正人目撃・一部撮影(クヌギ生木); 多数, 黒川, 27-VII-2023, 雛倉正人目撃・一部撮影(クヌギ生木・シラカシ樹液・クヌギに産卵行動あり)(図 2); 1♂1♀, 上麻生(柿生の里特別緑地保全地区), 11-VII-2023 雛倉正人撮影(クヌギ生木); 1♂1♀, 上麻生(柿生の里特別緑地保全地区), 24-VII-2023, 雛倉正人撮影(クヌギ生木に産卵); 多数, 片平(柿生緑地), 31-VII-2023, 雛倉正人目撃・一部撮影(クヌギ生木); 多数, 万福寺(万福寺さとやま公園), 31-VII-2023, 雛倉正人目撃・一部撮影(クヌギ生木); 多数, 万福寺(万福寺さとやま公園), 12-VIII-2023, 雛倉正人目撃・一部撮影(クヌギ生木・産卵行動あり)(図 3, 図 4); 1ex., 万福寺(万福寺さとやま公園), 27-VIII-2023, 雛倉正人撮影(クヌギ生木)。

[多摩区] 1♀, 榊形(生田緑地), 15-VII-2023, 雛倉正人採集(同日多数目撃・一部撮影、クヌギ生木・産卵行動あり)(図 5)。

[宮前区] 1ex., 水沢, 9-VIII-2022, 三田村瞬撮影(クヌギ生木); 1♂1♀, 水沢, 9-VII-2023, 三田村瞬採集(クヌギ生木); 4exs., 水沢, 22-VII-2023, 三田村瞬目撃・一部撮影(クヌギ生木・3 例は全て同一木)。

以上のように、黒川における 2019 年・2020 年の 2 例と、2023 年の 1 例を除き、全てクヌギ生木から見出され、生木からは樹液が出ていることが多かった。雌雄がペア

*特定非営利活動法人 かわさき自然調査団

Kawasaki Organization for Nature Research and Conservation



図 1. コナラ樹液にて発見時 (黒川)



図 5. 雌の単独産卵 (生田緑地)



図 2. シラカシ樹液を舐める個体 (黒川)



図 3. 雄の産卵保護行動 (万福寺さとやま公園)



図 4. クヌギ樹液とペア個体 (万福寺さとやま公園)

で行動することが多いが、詳しくは考察で述べる。

考察

筆者の一人雑倉が麻生区黒川で本種を見出したのは、偶然にもコナラであった。しかし、日本産カミキリムシ全種の餌植物出典集大成といえる文献 (小島・中村, 1986) や近年の権威ある図鑑 (大林・新里, 2007) でも、本種の食樹としてはクヌギのみ挙げられている。黒川での観察から、カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* (Murayama) の穿孔により、コナラ、クヌギ、シラカシ *Q. myrsinifolia* Blume の穿入生存木に樹液が生じているが、時にはシラカシ樹液にも本種が来ることがわかった。クヌギ以外のブナ科も宿主にならないかとの素朴な疑問があったが、コロナ禍による行動制限や本業の多忙もあり、納得のいく観察はできなかったのが実情である。

以降 2023 年になって本種が簡単に見つかるようになり、撮影中重要な行動が判明した。本種は雄が雌の上に乗る、つがいで見出されることが多い。なんとなく「交尾」と認識される場面であるが、ほとんどのシーンで雄は尾端を雌に接触させていない。交尾の最中のごく短時間であり、ペアリング行動と呼んだ方が妥当と思われる。しかも雄が上に乗ったまま、雌が産卵管を樹皮に立てる行動を複数回撮影できた (図 3)。本種は生木に発生し (伐採木や立ち枯れで観察したことがない)、日没して周囲が暗くなると、どこからともなく現れて幹を歩き回り、ペアリングに至る。生田緑地では雌の単独産卵行動にも遭遇した (図 5)。しかし、産卵中の雌に雄が干渉する、あるいは雄同士が争う場面も見ている。本種の場合、雌をめ

ぐる争いも生じることから、産卵中の雄による保護は、種の保存の観点から意義ある行動と考えられる。また、2023年の大発生時、大多数の観察例はクヌギでのみ見出された。状況証拠ではあるが、本種の通常の発生源は、従来の文献通りクヌギであり、コナラやシラカシは成虫が時折餌場として樹液を利用するのが一般的と考えられる。宮前区の産地のみ観察木は単木に限られていたが、他の産地ではかなり離れた複数の木で観察されている。

本種の成虫寿命は夏の平地のカミキリムシとしては長い。産卵季節は1ヶ月近くに及び、8月末でも生き残りの個体が見られた。成虫は樹液から栄養源を得ており、樹液の多寡が本種の寿命にも影響しているのかもしれない。最近の文献では、室内保管されたクヌギ材から5月から6月にかけて羽化脱出した例があり(原島, 2023)、野外における9月の観察例もある(櫻井, 2023)。

多摩区生田緑地や麻生区片平、上麻生、万福寺(最寄り駅柿生・新百合ヶ丘のエリア)などの生息地は、2023年夏に見出されており、ここ1~2年の間に急速に分布を拡大した場所である可能性が高い。当初の発見地である黒川においても、2023年にははるひ野の住宅地により近い林分で見出されるようになってきている。またインターネット上では、八王子市の長池公園などの指定管理者(ひとまちみどり柚木)のスタッフが書いたブログに、日野市、八王子市における7月の観察例が存在した。特に日野市の画像は、幹一面に数十の個体がたかり、気味が悪いほどである。直近の報告(七里ほか, 2023)からも、本種が多摩丘陵全域で増えていることが窺われ、また、湘南(和田ほか, 2023)や丹沢山麓(黒川ほか, 2023)の記録も現れているので、神奈川県内の広範囲で今後確認される可能性が高い。なお筆者は、現在居住する座間市内の公園や、多摩丘陵により近い相模原市南区(中央林間付近)の雑木林も調べてみたが、2023年時点では発見に至っていない。

本種はアオカミキリの仲間としては例外的に夜行性であり、華やかな金属光沢のある顕著な種であるが、従来日中の隠れ場所に関する報告は乏しい。しかし最近では、コナラ衰弱木の梢やその付近のササ類からの発

見例(七里ほか, 2023)や、クヌギ樹液付近の建屋の隙間からの発見例(黒川ほか, 2023)、ナラ枯れ対策用のビニールシートからの発見例(和田, 2023)もある。分布拡大や個体数の急増により、確認機会が増えたのかもしれない。

では、同時期に進行したナラ枯れと、本種の増大はどのような関連があるのだろうか。東京都の武蔵野台地では、ブナ科樹木萎凋病(ナラ枯れ)によるフラスが多量に排出されたクヌギ(樹液が出なくなったものも含む)において、ペア個体を含む多数の本種が観察されている(櫻井, 2023)。しかし、筆者らが本種を観察したクヌギには、衰弱が顕著な木はあまり見られなかった。

生木食いの昆虫の生態を正確につかむことは難しい。生きた樹木をあえて切って中味を調べることは、環境保全や労力、作業安全の点からも現実的でないからである。衰弱したクヌギが増え生息条件が整ったという意見もあるが、クヌギそのものが大丈夫なのだろうかという疑問もわいてくる。そこで誰もがができることは、本種が沢山見られた木を覚えておき、翌年にわたってその樹木の健康状態や近傍の本種の発生を記録することであろう。筆者の一人難倉は、麻生区柿生において里山管理や毎木調査もしており、その現場においては、2020年から3年間多摩丘陵で猛威をふるったナラ枯れは、2023年には新規の枯死がほとんど無く終息の兆しも見られている。生木に入るカシノナガキクイムシにとって、そのほかの生木に入る昆虫が増えることは、競争相手が増えることを意味し、増加に歯止めがかかることはありうると考えられる。

一方で、2019年夏の取材では、カブトムシ *Trypoxylus dichotomus septentrionalis* Kôno やクワガタムシ類などの大型甲虫の生きた写真を探しており、樹液の出るポイントが少なく苦労した思い出がある。その時は、樹液を出す昆虫であるボクトウガ *Cossus jezoensis* (Matsumura) やカミキリムシ類が少なくなったからではと考えていた。しかも発見したポイントは、やがてナラ枯れを起こし樹液が出なくなり消滅した場所もあった。ところが、カシノナガキクイムシは毎年発生木を替え、穿孔されても生きている樹木は樹液を出し、樹液に依存する甲虫はかえって増える結果になった。市街地内に

狭小な森林がある柿生では、現在カブトムシは普通に見られる。それでは、カシノナガキクイムシが消え去ったら、また樹液や朽木が減って、減っていく昆虫も出てくるのだろうか。これらの疑問の答えを見出したければ、継続観察により確かめていくしかないと考える。

おわりに

本種が今後、多摩川近傍や市内のより南の地域で見つかるかについて、興味もたれる。また本種の生態を観察して、特にナラ枯れとの因果関係については、状況証拠であり検証は難しいと感じた。絶滅危惧種といわれていた綺麗なカミキリムシが増えて面白いと単に思うのではなく、雑木林とそれをとりまく様々な昆虫との関係を見つめ、自然という複雑な仕組みのピースを解いていく、これは遠大だが面白い作業に違いない、そのような努力は必要なことであると思う。

なお、2019年の麻生区黒川で発見された標本は、川崎市青少年科学館に収蔵されており、それ以後の標本も順次収蔵予定である。

謝辞

川崎市青少年科学館の高中健一郎氏には本稿作成に当たってご助言を頂いた。ここに感謝する。

引用文献

- 韓昌道, 2023. 東京都小平市でアカアシオオオカミキリの多数発生を確認. 月刊むし, (624): 49-50.
- 原島真二, 2023. 狭山丘陵におけるアカアシオオオカミキリの記録. うすばしろ(71): 9-10.
- 伊藤淳・真田栞, 2022. 横浜市青葉区でア

- カアシオオオオカミキリを採集. 神奈川虫報, (208): 95.
- 伊藤淳・澤田裕二・中里俊英・林友彦, 2009. 東京都稲城市のカミキリムシ. 神奈川虫報(167): 53-68.
- 川崎市青少年科学館編, 2021. 川崎の生きもの. 143pp., 川崎市青少年科学館, 川崎.
- 小島圭三・中村慎吾編, 1986. 日本産カミキリムシ食樹総目録. 336pp., 比婆科学教育振興会, 庄原.
- 黒川生翔・黒川結生・渡辺恭平, 2023. 秦野市でアカアシオオオオカミキリを採集. 神奈川虫報(211): 45.
- 大林延夫・新里達也編, 2007. 日本産カミキリムシ. 818pp., 東海大学出版会, 秦野.
- 櫻井博, 2023. 東京都小金井市のアカアシオオオオカミキリ. うすばしろ(71): 4-5.
- 七里浩志・山野 崇・有馬 一・佐久間 聡, 2023. 横浜市北西部ほかでアカアシオオオオカミキリを採集. 神奈川虫報(211): 37-38.
- 高桑正敏, 2006. カミキリムシ類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006: 395-403.
- 和田一郎・萩原洋平・岸 一弘, 2023. 神奈川県茅ヶ崎市で採集・撮影したアカアシオオオオカミキリ. 神奈川虫報(211): 38-39.
- 和田武久, 2023. アカアシオオオオカミキリの昼間の活動を目撃. うすばしろ(71): 6-7.

インターネット情報

- 八王子市都市公園指定管理者ひとまちみどり由木 <https://www.h-yugi.org/blog> (2023年12月20日参照)